

元治元年二月廿三日より元治元年二月廿四日まで

P8311098 right

ありしるや模通(*1)(もとお)らざる返詞有し唯自からの焦思すること也、旅亭主人より今日程
□た、雪踏下駄也とて

駒詰下駄趣を履く(革はな緒添を差出せり)、依てまた謝品を投ぜしむ、午下第一時半衆積荷物
運輸し引き続乗組て風模様宜敷旨注進有し、即時夫々支度に取懸れり、午下第三時前
出立、途中江連に出会同行の津軽手船永宝丸へ乗組、本船への通ひ解並引船等拾数艘

(青森出帆)を出し前□附添某の乗組贈向等願て領主より手当にて注意浅からず、厚遇の手数許
多なり、程なく出帆、箱館表より廻りて神速丸御船にて本船を引きけり、

廿四日 未 陰風 昼五十五度(撰氏 12.8度)

(函館着港) 残夢半醒時 朝第七字時前函館港着帆、箱館奉行支配沖の江掛同心加藤金四郎、黒
沢

祐吉並神速丸へ船乗組に集りし同心横開某同御雇仁杉某着賀に來り、且つ迎えの船さし越す頃合
等

聞合、奉行美濃守よりも同賀使の者さし越、且 〆機嫌伺至無問合せ有し、無の旨

P8311098left

申達す、無程迎船として引舟四隻を添さし越す、船中附添う足輕宿に來共面会謝辭

申述べ右迎船へ乗移り、第九字時頃沖の江御番所へ上陸、供方荷物の捌を待受け御番所

詰、定役兩人同心組頭老人同心兩人へ面晤し第十時過支度相整江連供に、函館町旅亭高龍寺へ

至着、途中心心老人付添、足輕兩人先払、町年寄名主共拾五六名、麻上下にて途中出迎案内等

有し、逗留中□□の節は是式足輕老人先払為(として)差出趣なり、旅亭宿寺門に代僧出迎をり

申し、着の儀奉行御役所へ使者を以て申遣わし且明日の御役所へ相越す旨申達す、飯田某兩三日

前より

当地出張せしにて着賀にて來り、例の遊俠風の農話懇、且息病服の儀初て聞り、右序を以て牛込
より

の沓書□よりの沓書を渡す、且つ又酒井弥□衛門面会し紹介申聞く、太左衛門着帆届として

來る、其の他のものは船□にて賀□のため少々延期の段申聞る、菊池(豫)、永持、水野(甲)、

り平山(謙)へ一封ずつ、

永持へ小柴(喜)へ山下(金)より高木□へ一□づつ、五□の包に為持達遣わす、此度一行中の

御徒目付佐藤(真)

*1模通(もとおる) 廻る、めぐる

(内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。